

第十三回 齋藤茂吉短歌文学賞

# 竹山 広『竹山広全歌集』

雁書館・ながらみ書房

選考委員

委員長 岡野 弘彦

委員 尾崎左永子

佐佐木幸綱

高野 公彦

高橋 睦郎

(五十音順)

竹山 広『射禱』(自選十首)

われ死にてのち何ひとつ変るなきこのおそろしき三千世界

迷ひふかき人間は深夜起き出でて大いなる昆虫凶鑑をひらく

家出づるとき固めたる一存の路上ふつつと欲を帯びゆく

手抜きしてでも生きたいと思ふ日のエレベーターに残る人の香

未臨界ゆゑ実験にあらずといふ国に天罰をまた空想す

近づける葡萄の粒にみどりごの濡れたる口はおしひらかれぬ

まるったと言ひて終りたる戦争をながくかかりてわれは終りき

人界に降りくだるときある雪はためらひて宙に戻らむとせり

午後の日の残れる椅子にゆきて座る遅れてきたるたましひのため

病み重る地球の声のきこゆると言はしめてただ神は見たまふ

## ● 選考委員による選評

### 天に射込む、祈りの日常詠

岡野弘彦

受賞対象となったのは、『竹山広全歌集』中の「射禱」で、竹山氏の第六歌集に当る。作者の七十九歳の春から、八十一歳の春までの作品四五七首が収められている。

「射禱」とは、カトリックの信者が日常と見える、天に射込むように短く篤い祈りの言葉であるという。そして、この歌集に収められた短歌もまた、現代生活の中の射禱のような思いの凝縮した作品である。

長崎の原爆を被爆し、戦後の闘病生活を体験しながら、現代を真摯に、濃密に生きた作者が、老熟の年齢に至つての広く深い思いを一首一首に集中した、重みのある日常詠で、現代にあるべき歌の姿だと思われる。

### 大人の歌

尾崎左永子

ことばに無理がない。調べに無理がない。まして心の在り様ように全く無理がない。新しく全集に組み入れられた『射禱』にはとくにその傾向がつよく、第一歌集の、あの原爆体験の重さも、生の苦痛も、すべては茫々と光を湛えるさくらの中に和なんでしまう印象を持った。本来、歌とは、かくあるべきものなのだろう。二一歳にして作歌をはじめ、第一歌集『とこしへの川』を出した時すでに六一歳。

すべて大人の歌なのである。最近濫発される子供じみた歌集とは、根本的に歌への心寄せが違う気がする。この受賞は当然と肯定すると同時に、この歌人を育てて来た「心の花」の伝統についても感じる所が大きかった。

### 受賞を喜ぶ

佐佐木幸綱

日本の現代文学史は、原民喜『夏の花』、井伏鱒二『黒い雨』、林京子『ギヤマン・ビードロ』につぐ原爆文学をもつたのである。本賞の受賞を心から喜ぶ一人である。

『射禱』の作にあるように、二十世紀とは「原爆を産みたる世紀」であった。私たちは偶然その二十世紀に地球上に居あわせた仲間同士だ。運不運ではない。たまたま生きて居あわせたことの意味を、竹山広氏は深く深く問いつづけてきた。

『射禱』は次の一首を巻軸におく。

病み重る地球の声のきこゆると言はしめて  
ただ神は見たまふ

地球の将来は、あくまでも人間の責任にゆだねられている。竹山氏の問いによってかいま見えた切ない真実である。

### ゆつたり感と、自由闊達さ

高野公彦

心の傷みをかかへて生きながら、作品にはどこかゆつたりした味はひがある。それが竹山広の歌である。

竹山さんは言葉の達人である。言ひたいことがあれば、どんなことでも自由に短歌で表現することができる人だと思ふ。ゆつたりした味はひが生まれるのは、言葉扱ひに余裕があるためだ。

だが、それだけではない。竹山さんは、出会ひたくないことに会つてしまった自分の人生を、自力でほぐし、『普通』の人生に作り換へようとした意力（いりよく）の強さを持つ。それがおのづから、人々に活力を与へるやうな〈ゆつたり感〉と〈自由闊達さ〉となつて結晶したのであらう。

## 現在と注釈 高橋睦郎

私はかねがね短歌を位の高い詩として尊敬しているが、竹山広さんの短歌の位の高さは群を抜いている。

とりわけ今回の「全歌集」に収められた「射禱」は高さを極めて感じられた。誇り高いが傲なぶらない、つましいが阿おもらない歌人の人格がそのまま歌になっている。

私は今回の「全歌集」を新歌集「射禱」とその注釈として読んだ。表現者はつねに現在に立つ。現在に至る過程は現在のための注釈であり、それ以上でもそれ以下でもない。



### 第13回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

竹山 広 (たけやまひろし)

大正9年2月29日長崎県田平町に生まれる。昭和16年「心の花」に入会。翌年「鶯」に移り、2年後結社を離れる。昭和20年8月9日、長崎原爆に被爆し、その後10年間作歌中断。昭和30年「短歌風光」に入会し、はじめて原爆詠を作る。昭和61年、現代歌人協会会員。

#### 歌集

『とこしへの川』(昭和56年)、  
『葉桜の丘』(昭和61年)、  
『残響』(平成2年)、  
『一脚の椅子』(平成7年)、  
『千日千夜』(平成11年)、  
『射禱』(平成13年、『竹山広全歌集』に収録)

#### 受賞

平成8年 第4回ながらみ現代短歌賞  
『一脚の椅子』

### 受賞の言葉

竹山 広

昨年暮に『竹山広全歌集』を出したとき、一生を費やした歌がこれだけかとさびしい思いをしたが、このたびその全歌集が、第十三回「齋藤茂吉短歌文学賞」を受賞することになり、この上もない喜びを頂いている。

齋藤茂吉という名を知りその歌を知ったのは十代の終りで、それが短歌に深入りする契機となった。以来、生涯の師として仰ぎつづけてきた。それだけに今回の受賞はありがたく、そしてうれしい。

賞をいただくため初めて訪れる齋藤茂吉ゆかりの地は、体力がないため会場の周辺に限られるが、これまで作品を通して想像するだけだった山形の地に、生きて足を踏み入れることを思うと夢のようである。

選考に当られた方々、支持して下さった方々に心から感謝申し上げます。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房  
第二回 本林勝夫 『斎藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社  
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社  
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店  
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不織書院  
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房  
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社  
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社  
第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社  
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店  
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社  
第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇  
山形市松波二丁目八一―一 山形県文化環境部文化振興課内  
TEL・〇二三―六三〇―三三〇六